

オンライン実習に関する 教育価値向上のポイント について (報告)

2020年12月3日



一般社団法人

経済同友会インターンシップ推進協会

目次

はじめに～オンライン教育価値向上プロジェクトの目的	2
第1章 2020年度経済同友会インターンシップの取組.....	3
第2章 本プロジェクトにおける論点及び議論の到達点	4
1. 検討のフレーム	4
2. オンライン実習の「強み」	4
3. オンライン実習の「弱み」	5
4. まとめ	6
5. オンライン実習による対面実習の代替可能性.....	7
第3章 ウイズ/アフター・コロナ期のインターンシップへの期待.....	10
1. 基本的考え方	10
2. 企業への期待.....	10
3. 大学への期待.....	11
おわりに	12
参考資料.....	13
1. ウイズ/アフター・コロナ期のインターンシップに係る企業への期待に関する具体的取組例.....	13
2. 2020年度経済同友会インターンシップに係るアンケート集計結果.....	14
3. 審議経過	27
4. 委員名簿	28

はじめに～オンライン教育価値向上プロジェクトの目的

経済同友会インターンシップ推進協会（以下、「当協会」という。）は、2019年4月、望ましい産学連携による教育効果の高いインターンシップを行うために設立された。その事業の中核は、経済同友会会員の所属企業と全国の国公私立大学及び高等専門学校（以下、「高専」という。）をつなぐ「経済同友会インターンシップ」事業である。この事業は、1、2年次の大学生（高専生含む）が、正課として比較的長期（原則4週間）にわたる企業での就業を体験することにより、自らのキャリア形成に資する気付きを得て成長するプロセスを支援することを目的としている。

2020年、設立2年目を迎えた当協会は、新型コロナウイルス感染拡大による社会経済の混乱という厳しい状況のなか、7月、会員企業・大学・高専に対面実習の中止と、オンライン実習への転換を要請することとなった。この要請に対し、会員企業24社（当時）のうち、10社からオンライン化への賛同が得られたため、16大学・2高専から計59名の学生がオンラインによる実習を体験することができた。

実習のオンライン化により、当協会の「コロナ禍においても学生の学びを止めない」という当協会の目標は一程度達成できた。そして、社会全体がデジタル・トランスフォーメーションに向かう中、教育目的のインターンシップをオンラインで実施するという貴重な経験が得られた。

その一方で、緊急であったためやむなくオンライン化が不可能とされ、実習先が決まっていながら学びの機会が得られなかった学生たちも存在した。

当協会は、2020年10月、会員企業・大学等の協力を得て「オンライン実習教育価値向上プロジェクト」（以下、「本プロジェクト」という。）を立ち上げた。その目的は、コロナ禍という未曾有の危機においても学生の実社会で学びを保障し、かつ、その教育効果をより確かなものとするために、対面とオンラインの併用によるインターンシップの望ましい在り方を検討して論点整理を行い、次年度以降の実習に反映させることにある。

本プロジェクトの検討チームは、会員企業、大学、そして当協会から参加した委員（別添委員名簿）により構成、学生へのアンケート結果も踏まえながら精力的に議論が展開され、多くの実践的な知見が得られたため報告書として取りまとめた。

この報告書は、本プロジェクトにおける論点及び議論の到達点を明らかにするとともに、次年度はもとより、その後のウイズ／アフター・コロナ期をも見据えた教育効果の高い産学連携教育の在り方を示すものである。

第1章 2020年度経済同友会インターンシップの取組

経済同友会インターンシップは、原則4週間という比較的長期の期間を確保して行うことが特徴である。しかし、2020年度は実施期間となる大学等の夏期休暇と、東京オリンピック・パラリンピックの開催期間が重なったため、原則10営業日以上、最低5営業日以上を確保して実施することとなっていた。年度当初の計画では、このような方針に基づく調整を経て会員企業24社において、計134名の学生受入れが行われることとなっていた。

しかし、コロナ禍の影響により、14社がやむなく実習を中止し、10社がオンライン実習に転換の上、学生を受け入れることとなった（図表1）。

図表1 2020年度オンライン実習実施企業一覧

企業名	当初		オンライン後	
花王	9/7(月)～18(金)	実働10日	9/7(月)～9(水)	実働3日
キッコーマン	8/25(火)～9/14(月)	実働16日	9/15(火)～23(水)	実働7日
凸版印刷	9/8(火)～16(水)	実働7日	9/9(水)～16(水)	実働6日
日本信号	8/20(木)～9/4(金)	実働12日	8/31(月)～9/11(金)	実働10日
日本航空	9/14(月)～18(金)	実働5日	9/14(月)～17(木)	実働4日
東日本旅客鉄道	9/7(月)～18(金)	実働10日	9/9(水)～11(金)	実働3日
損害保険ジャパン	9/7(月)～18(金)	実働10日	9/7(月)～18(金)	実働10日
野村證券	8/17(月)～9/4(金)	実働15日	8/19(水)～9/1(火)	実働10日
三井住友銀行	8/13(木)～17(月)	実働5日	(変更なし)	
三井不動産	9/7(月)～17(木)	実働9日	(変更なし)	

出典) 事務局作成。

事後に実施したアンケートによれば、オンライン実習実施企業10社中9社が「オンライン化はやむを得なかった」と回答した。さらに、オンラインであっても学生の発表レベルは高かったといった意見や、地理的・時間的制約が少ないといった積極的な評価も見られた。大学についても18大学（高専含む。以下同じ。）のうち、17大学が「オンライン化はやむを得なかった」と回答した。大学からの意見においても、オンラインでも実務に近い内容の実習が提供されていた、といった評価がみられた。

学生からの評価については、ざっくばらんなコミュニケーションを行う機会を設けるなど、オンライン実習に対する学生の不安を解消する工夫や、海外に赴任している社員の話を聞く会を設けるなど、オンラインの「強み」を生かす取組に評価が得られた。

その一方で、企業・大学・学生の全てから、対面によるコミュニケーションや、現場に赴き、雰囲気などを含めて体験することの重要性についても、改めて多く指摘があった。

第2章 本プロジェクトにおける論点及び議論の到達点

1. 検討のフレーム

本プロジェクトにおいては、「2021年度経済同友会インターンシップの実施を含めたウイズ／アフター期におけるインターンシップの望ましい在り方」をテーマとし、今年度の実践例から、オンライン実習の「強み」と「弱み」そして対面型の良さを認識したうえで、これらを効果的に組み合わせる方法などを論点として検討を重ねた。

検討に際しては、事前に行った2020年度経済同友会インターンシップに関する企業・大学・学生からのアンケート結果を参照しつつ、各委員が論点に関する自らの見解をペーパーにまとめ発表。その後、委員相互で議論する方法により実施した。

2. オンライン実習の「強み」

(1) 時間と場所を選ばない

オンライン実習では、実習生は基本的に自宅から実習に参加する。これにより、実習会場までの移動コスト・時間が不要となり、とりわけ遠隔地から参加する学生にとっては多大なるメリットとなる。企業にとっても交通費、宿泊費、会場費等の負担が軽減される。加えて海外を含めた遠隔地に勤務する社員との交流も容易となる。

また、集合形式であれば、朝から夕方までの実習時間を設定し、かつ連続した日程での開催が一般的であったが、オンライン型であれば、分割日程の設定が容易である。

さらに、知識習得型の講義は録画しておくことにより、反復学習が可能になる。

(2) 時間を効果的に活用できる

オンライン実習における講義は、オンデマンド型とすることにより予想外の時間延長などを防止できる。また、同時双方向型のディスカッションにおいても、チャット機能や「挙手」ボタン、画面共有機能などの活用により効率的な議論が期待できる。さらに、オンライン実習においては経験的に議論の「脱線」がおこりにくいことが指摘されている。

(3) 新たな教材を活用することによる学習の高度化・効率化

従来、十分に活用されてこなかったオンデマンド教材をはじめとするデジタル教材の活用により、学習の高度化・効率化が期待できる。また、デジタル教材は、事前事後の準備学習や振り返り学習における教材としても有効である。

(4) 「新しい働き方」を体験できる

オンラインを活用したリモートワークは、企業において急速に普及しつつあるところであり、このような「新しい働き方」をいち早く体験できることは、オンラインの強みを知ることを含めて学生にとって有意義である。

3. オンライン実習の「弱み」

(1) 実習内容に制約が生じる

オンラインで実施可能な実習は、PC 上での作業やキット送付が可能な範囲に限られ、会社の施設・設備に直接触れなければ体験できないような種類の実習は行うことができない。

(2) 五感を活用しての臨場感に乏しく実習生の集中力の持続が難しい

工場などの施設見学へのオンラインの活用は、雰囲気等を含め臨場感をもって「現場」を理解させるうえで効果的とはいいがたい。また、対面に比べ、集中力の持続が難しい。さらに、グループワークなどの際にも一体感の醸成が難しく、ともすれば議論にフリーライド（ただ乗り）しようとする者を生じさせることもある。

こうした課題について 2020 年度の実習においては、施設見学の際に企業の指導担当者がカメラ付きノート PC を持参し、同時双方向性を確保したうえで現場を案内したり、講義や演習における 1 ユニット当たりの時間を短く抑えたりするなどの工夫がなされていた。

(3) 「社会人生活」が体験しにくい

宿泊先からの出勤に際して利用する電車による通勤など、社会人としての実生活を体験することによる意識転換が促せない。

(4) 「意外性との遭遇」が発生しにくい

オンライン実習は時間管理の面で効率的な運営が容易である反面、一つの「場」を共有し、時間を忘れて白熱した議論を展開することにより、相互に刺激しあい、「化学変化」を起こすような体験は得られにくい。また、現場における予定外のトラブルやハプニングに遭遇することでリアルな気付きや学びが得られることもあるが、オンライン実習ではそのような出来事は発生しにくい。

(5) 秘密漏洩の防止が困難

インターネットを通じて実習生に提供した情報は、回収が困難であることから事後の管理を委ねざるをえず、情報漏洩のリスクを否定しきれない。

4.まとめ

図表 2 は、オンライン実習の「強み」と「弱み」を踏まえた対面実習との比較である。

オンライン実習は時間と場所を選ばないという強みがある一方、対面実習は実習生が 1 か所に集まる必要がある。他方で、実習内容については、対面型では社内の施設・設備をフル活用できるのに対し、オンライン型は PC 上で作業可能又はキット送付が可能な範囲にとどまる。

運営に関しては、オンライン型は時間管理が容易である一方、対面型では「意外性との遭遇」が期待できる。また、オンライン実習は臨場感に乏しく、集中力の持続が難しいのに対し、対面実習では五感に訴えかける臨場感ある学習が可能である。さらに、オンライン実習には秘密保持が難しいという弱みがある。

なお、オンライン実習ではデジタル教材の活用が容易であるが、工夫次第で対面実習においてもデジタル教材の活用は可能である。

その他、オンライン型にはリモートワークなどの「新しい働き方」を体験できるメリットがある一方、対面型には満員電車での通勤などいわゆる「社会人生活」を体験できるメリットがある。

図表 2 オンライン実習と対面実習の比較

	オンライン実習	対面実習
時間と場所の制約	◎同時双方向型は場所を選ばない。オンデマンド型は場所に加え、時間も選ばない	△受講生は 1 か所に集合する必要がある、時間と場所の制約を受ける
実習内容	◎実習運営における時間管理が容易 ○デジタル教材の活用による学習の効率化、高度化が図れる △PC 上での作業又はキット送付が可能な範囲内でしか実習ができない △臨場感に乏しく集中力の持続が難しい △秘密保持が難しい	◎社内の施設・設備をフルに活用した実習や実地見学が可能 ◎五感に訴えかける臨場感ある学習が可能 ○「意外性との遭遇」が期待できる ○秘密保持に関する対策を講じることが比較的容易 ○対面型においてもデジタル教材の活用は可能
その他の効果	○リモートワークなど新しい働き方を体験できる	○通勤や職場での交流など「社会人生活」を体験できる

凡例) ◎：特に優れている。 ○：優れている。 △：劣っている。

出典) プロジェクト会議での議論に基づき事務局作成。

5. オンライン実習による対面実習の代替可能性

ここでは、これまでの議論によって明らかになったオンライン実習の「強み」と「弱み」を踏まえ、事前学習から集合研修までのプロセスごとに対面型をオンライン型に代替することの可能性について論じる。さらにオンライン実習の「強み」を生かした成果向上策や、「弱み」を踏まえた代替の限界についても言及する。

(1) 事前学習

事前学習とは、実習先企業又は所属大学からの指示により、集合研修に先立ち実習生が行う学習である。事前学習は、その内容により実習プログラムの一環として位置付けられるものと、実習生が自主的に行う準備学習とされるものがある。実際に行われる事前学習がそのいずれに該当するののかという判断は、各大学が各々の単位認定の基準に照らして行う。

オンラインの活用は、特に事前学習において大きな成果向上をもたらす可能性がある。例えば、実習開始に先立ち企業の指導担当者が実習生と個別面談を実施することにより、実習開始前から人物把握が可能になる。このような方法は、実習生同士の事前の「顔合わせ」にも活用できる。

従来、集合研修中に実施していた知識習得型の講義は、事前にオンデマンド型教材を視聴させる形式に変更することにより、集合研修の効率化が可能になる。

また、課題を指示し、レポートを提出させる形式の事前学習についても、web 会議システムや電子メール、チャット等の活用により、レポート作成過程において双方向性を確保して指導することができ、受講生相互の議論も可能となる。さらに、成果物のアウトプットについても、web 会議システムを用いたプレゼンテーションによって行うことが可能となる。

このように、同時双方向性（実習生相互のコミュニケーションという意味での多方向性を含む）を確保して行われるオンライン型の事前研修は、対面型の集合研修に比べても遜色のない効果が期待でき、「事前学習」と「集合研修」という、区分そのものを無くす可能性がある。

なお、ここで掲げた方法は、集合研修終了後の「振り返り」や実習成果発表等にも適用可能である。

(2) 集合研修

集合研修とは、実習生が受入先企業の事業所に集まり、一定期間、企業の担当者の指導のもとで就業体験を行う形態の学習である。その主な実施形態別にオンライン型への代替可能性について記述する。

① 講義

会社理解や業界理解、コンプライアンス・秘密保持などに関する一方通行型の講義は、オンライン型への代替可能性が高く、時間と場所を選ばないという特性を踏まえれば、オンデマンド型教材の活用も有効といえる。

なお、講義をオンライン型によって代替する場合は、既述のとおり、必ずしも集合研修の枠組みの中で実施する必要がない点にも留意すべきである。

② 個人演習

ここでいう個人演習とは、企業の担当者から課題を提示され、実習生が個人単位で資料やデータの収集・分析等を行い、それに基づくレポートやプレゼンテーション資料等を作成することをいう。

従来、限られた期間に集中的に実施される対面型の集合研修では、個人演習の時間を十分に確保することは難しく、事前・事後の課題として課されるケースが多かった。しかし、オンライン型の活用により、柔軟な日程で集合研修（オンライン上に「集合」する場合を含む。）を開催することが容易になり、分割開催される集合研修の合間に個人演習を課すことも可能になる。

また、ICTの活用により、企業の担当者が課題に取り組む実習生からの質問等に対応することも容易となっている。これらの工夫により、個人演習のより効果的な活用が可能となり、学習の深化が期待される。

③ グループ演習・プレゼンテーション

グループワーク、ディスカッション（先輩社員との座談会等を含む）、プレゼンテーション等については、web会議システムを活用することにより、オンライン型への代替が可能である。さらに、海外や遠隔地に赴任している社員とのディスカッションや、web会議システムにおけるブレイクアウトルームといった新たな機能を活用するなど、オンライン型ならではの成果向上も期待できる。

その一方で、雰囲気を共有し、相手の物言いや表情を見ながら議論を行う一体感や臨場感については対面型に及ばない。さらには、休憩時間等、実習時間外の「雑談」やそれによるインフォーマルな関係構築（「人脈形成」ともいえる。）など、対面型には付随する効果も多く、それらを含めてオンライン型でどう代替するかは新たな課題といえる。

④ 実務・実技実習、実地見学

技術系の実習など、企業の施設設備を使用しなければ実施できない実習や、販売同行、店頭・現場実習、工場見学等の実地見学、ロールプレイなど知識だけではなく行動や対応を評価する実技実習は、オンライン型による代替が困難である。

2020年度経済同友会インターンシップでは、同時双方向性を確保しての工場見学など、弱みを克服するための工夫がなされ成果を上げているが、こうした企業努力を促進するためにも今後の新しいバーチャル・リアリティ技術による一層の改善に期待したい。

なお、リモートワークやweb商談など、企業における働き方も急速にオンライン化が進んでおり、このような環境では、オンライン実習こそがリアルな就業体験になりうることから、新たな実習の在り方として今後検討する必要がある。

ここまでの議論を踏まえたオンライン実習による対面実習の代替可能性について、図表3に示す。

図表3 オンライン実習による対面実習の代替可能性

オンライン実習への代替可能性が高い実施形態		オンライン実習による代替が難しい実施形態
同時双方向型	オンデマンド型	
<ul style="list-style-type: none"> ● グループワーク（基本知識や意欲の水準が揃っていることが望ましい） ● 実習開始前の実習先担当者との個別面談、実習生相互の顔合わせ ● プレゼンテーション 	<ul style="list-style-type: none"> ● 座学講座（インプット中心） ● 反復学習型知識定着プログラム 	<ul style="list-style-type: none"> ● 工場見学 ● 販売同行 ● 店頭・現場実習 ● 工場・ラボ内設置の機械設備等の操作実技 ● 知識だけでなく、行動や対応を確認するロールプレイや演習

出典) プロジェクト会議での議論に基づき事務局作成。

第3章 ウイズ/アフター・コロナ期のインターンシップへの期待

1. 基本的考え方

現下の情勢に鑑みれば、2021年度はウイズ・コロナ期における実習となる可能性が高く、プログラムの一部又は全部のオンライン化は避けられない可能性が高い。

また、コロナ禍の収束後、すなわち、アフター・コロナ期においても、リモートワークやオンライン授業の定着などの変化は不逆的なものと予想され、ビフォー・コロナ期の実習にそのまま回帰することは現実的ではない。

我々は、このような認識の下、オンライン実習をウイズ・コロナ期における非常時対応としてのみならず、アフター・コロナ期を見据えた学習成果向上策としても位置づけ、インターンシップの新たな在り方として一体的に議論した。その際、対面型の意義についても再確認し、両者の望ましい組み合わせについても検討した。

特に、ウイズ・コロナ期においては、実習の各要素を「モジュール」としてとらえ、企業・大学間の合意の上で、感染拡大状況に応じて対面型とオンライン型の比率や有無を変更できるようにするといった、柔軟な制度設計を行うことも検討の余地がある。

これらの考え方を踏まえ、今後のインターンシップの在り方について、次のとおり、企業及び大学への期待を示す。

2. 企業への期待

実現については受入企業ごとに事情があるが、教育効果を高める指針として示す。

※別添「具体例」についても参照されたい。

(1) 感染防止に最大限留意しつつ学生の学習機会を確保

学生にとって、在学中における就業体験の機会はけっして多いものではない。学生を受け入れる企業は、次世代人材育成の重要性に鑑み、感染防止策に留意しつつも様々な手段を駆使し、学生が教育目的のインターンシップを体験できる機会を閉ざさないよう、最大限努力することが期待される。

(2) オンラインという新たなツールを積極的に活用した実習効果の最大化

オンライン実習は対面実習の有力な代替策となりうるだけでなく、実習効果（一人ひとりの知識意欲向上と参加者の意見交換）を高めるためのツールとしてコロナ禍の収束後を含めて有効活用しうる実施形態である。

企業は、このような観点からオンライン実習の積極的な活用を検討されることが望ましい。

(3) オンライン実習における「弱み」の補完策

オンライン実習は PC による作業が中心となり、疲労による集中力の持続が難しいなど、さまざま「弱み」についても指摘されている。

企業は、実習生の満足度を高め、学習効果を維持できるよう、「弱み」を補完する対応策について検討することが望まれる。

また、とりわけ感染収束後は、対面型が強みを発揮する実習内容については、オンライン型と効果的に使い分けるなどの対応も期待したい。

3. 大学への期待

(1) 感染防止対策と健康管理

実習に参加する学生に対しては、手洗いの励行やマスクの着用、事前の健康観察など、感染防止対策及び健康管理についての指導を徹底することが望ましい。

(2) 学生の実習参加環境の確保

オンライン実習に参加する学生に対しては、PC やインターネット環境の提供など、企業・学生からの求めに応じて実習参加環境の確保に配慮することを期待する。

(3) 秘密保持と情報漏洩防止

インターネットの利用に関するリテラシーを含め、秘密保持や情報漏洩の防止に関する事前研修を十分に行うことが好ましい。

(4) 実習時間と単位認定

単位認定に際しては、単位制の趣旨に基づく学習時間の確保に留意しつつも、十分な学習成果が見込まれる場合は、オンライン実習の特性に見合った柔軟な対応を行うことを期待する。

おわりに

本プロジェクトチームにおける検討により、今年度の経験から見たオンライン実習の「強み」と「弱み」が明らかになった。企業及び大学は、オンライン型の「強み」を最大限に生かし、単なる対面型の代替手段としてだけでなく、教育成果向上のためのツールとして活用することを期待したい。

その一方で、対面型ならではの教育効果についても改めて確認されたところであり、対面型が強みを有する面については、従来の実習形式を維持・改善しながら、オンライン型との適切な組み合わせがなされることが望ましい。

その組み合わせ方法については、実習の目的・内容や、受入企業の業種・業態・職種によって様々であり、個別の事情に応じて最適な方法が選択されるべきである。

一連の検討を通じて我々が再認識したことは、いかなる事態においても、「望ましい産学連携による教育効果の高いインターシップを実現するためにはどうすべきか」ということを念頭に、常に原点に立ち返って考えることの重要性である。

コロナ禍という非常事態にあっても次世代を担う人材育成の重要性は不変である。インターシップに携わる全ての企業と大学等は、この大きな目的のために互いの立場を尊重しつつ、教育効果の高い実習プログラムを共に作り上げて、学生の成長を支援していくことを期待したい。この報告書がその一助となることを願ってやまない。

1. ウイズ/アフター・コロナ期のインターンシップに係る企業への期待に関する具体的取組例

- (1) 感染防止に最大限留意しつつ学生の学習機会を確保
 - ・実習の一部又は全部をオンライン化する。
 - ・リアル体験を必要とする部分は可能な限り対面型で実施するが、感染拡大時や実習実施事業所が感染拡大地域に該当する場合は、オンライン型への切り替えや、他の地方の事業所の活用なども柔軟に検討する。
- (2) オンライン実習という新たなツールを積極的に活用した実習効果の最大化
 - ・実習開始前のオンライン面談の実施により、実習生の人物把握を行うとともに、不安の解消を図る。
 - ・事前課題を中心にオンデマンド教材を有効に活用する。
 - ・海外や遠隔地に赴任している社員との意見交換の機会を設定する。
- (3) オンライン実習における「弱み」の補完策
 - ・単元（ユニット）のコンパクト化や、一日当たりの実習時間を短く抑える（例えば半日程度の開催）など、パソコンと向き合う学生の疲労と集中力の持続時間に配慮する。
 - ・学生に誓約書を提出させる、会社として個人情報流出に備えた保険に加入する、セキュリティ対策が施された自社 PC を貸与するなどの方法により、秘密保持に関する対策を講じる。
 - ・座談会やランチミーティングなど、実習先企業の指導担当者との、又は実習生相互のコミュニケーションの機会を意識して作る。
 - ・実習の全てをオンライン型で実施する場合も、感染収束後に施設見学会に招待するなど、正課外のフォローの実施に留意する。

2. 2020 年度経済同友会インターンシップに係るアンケート集計結果

(一部抜粋)

(1) 実施概要

狙い	今年度のインターンシップの活動を振り返り、今後の改善に向けて活用すること
調査対象	2020 年度経済同友会インターンシップに参加の学生、企業、大学等のご担当者

(2) 企業へのアンケート結果

調査対象	当協会の会員企業 24 社（実施日時点の社数）のうち、2020 年度経済同友会インターンシップオンライン実習参加企業 10 社 ⇒花王、キッコーマン、損害保険ジャパン、凸版印刷、日本航空、日本信号、野村證券、東日本旅客鉄道、三井住友銀行、三井不動産
実施期間	2020 年 9 月 28 日~10 月 9 日
回収率	10 社中 10 社 (100%)

① 今年度のインターンシップ（オンライン）について

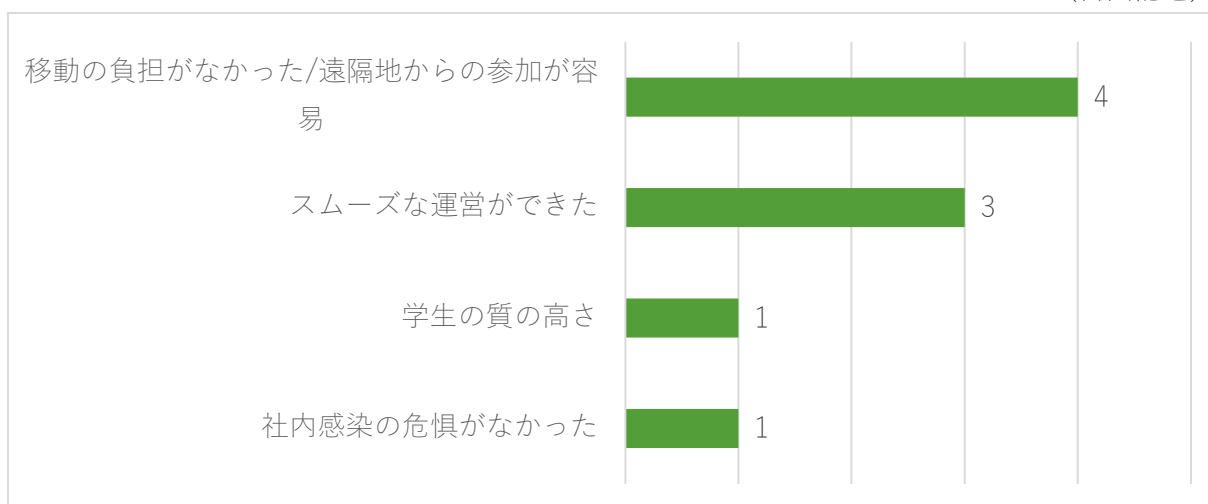
Q1 今年度、オンラインで実習を行ってみてどのように思いましたか。

(単一回答及び自由記述)。

オンラインでの実習はやむを得なかった（9社）	
	学生と弊社社員の健康・安全面を確保するためにはやむを得なかった。ただ、例年と比較し日数を短縮した中でも、発表のレベルは高いものとなったと感じている。
	学生の安心、安全面を考慮しオンラインでの実習できよかった。また、地理的、時間的制約が少ないため、遠方の学生にも利点があったと思う。
	感染拡大防止を考慮すると、オンライン対応が望ましいと思う。
	参加学生は開催初日は緊張している様子だったが、徐々にリラックスして参加してくれるようになった。オンラインではあったが、積極的に質問をしてくれ、大変有意義な時間になった。
	従来は体験学習を重視するプログラムで展開していたものを、目的は変えずにオンラインへと移行したが、限られた時間でも、一定の効果・満足度は得られることがわかった。
	直前での方針変更を受け、事前準備、社内調整が大変であった。実習型であったので、オンラインで実施できるプログラム立案と受入れ部門に苦戦した。想定していた通信トラブルは殆どなく問題なかった。
	弊社としては各施設を現地見学してもらうことが非常に重要だと考えており、困難な点があったが、事前に動画を撮影しておくなどで一定の代替が可能であったため、中止にするよりはオンラインでも開催できてよかったと考えている。
リアルでも行うべきだった（1社）	
	弊社の業務の概要については理解を深めていただくことができたが、職場の雰囲気や実際の作業を見学することや幅広い社員とのコミュニケーションを図る面では、リアルでの実施が必要だと感じた。

Q2 今年度のインターンシップについて、どのような点がよかったですか。

(自由記述)



(注) 事務局で自由記述を整理。

移動の負担がなかった/ 遠隔地からの参加が容易	就業体験の受入部署側の、地域の制約がなく、全国様々な拠点の部署を経験することができた。
スムーズな運営ができた	集合実施と遜色なくディスカッションができ、リアクションやパワーポイントでの書記など、オンラインならではの利点を生かすことができた。
学生の質の高さ	全てオンライン実施にするのは初めてのことで、カリキュラムは手探りではあったが、最終日のレポート報告会では弊社が想定していたより高いクオリティのレポートを発表していただいた。

Q3 今年度のインターンシップについて、どのような点を改善すべきですか。

(自由記述)

オンラインプログラムの充実 (3社)	オンライン研修で紹介できる動画のコンテンツを増やす必要があると感じた。
	実務プログラムの検討、精査。
	セッションごとの繋がり、ストーリーを持たせること、また、発表やワークの形式にバリエーションを出して飽きさせない工夫を施すこと。
学生と社員との交流・接点の拡充(3社)	参加学生の決定からインターンシップ実施までの間に、人物把握の面でもっとコミュニケーションを図り、本学習での関心事項等、事前に知る機会があった方がよいと考えている(リアル開催であっても同様)
	参加学生の負担を考慮し、対面時より短い時間でプログラムを作成したが、学生と社員の交流の時間が短くなってしまったため、今後はより多くの時間を確保すべき。
	オンラインの利点を生かし、部署内だけでなく様々な働き方や業務を行っている社員と接点を持てるのではないかと検討している。

会社の雰囲気の伝え方(1社)	社員の雰囲気や社風、当社のビルオフィス内部の雰囲気等は、対面の方が伝わりやすいと感じている。一方、企業側の努力でこの点も一定伝えることができると考えており、iPadで職場を撮影し、雰囲気を伝えたところ、学生の一定の満足は得られた。
スケジュールの見直し(1社)	全体的に時間がタイトだったため、もう少し余裕を持ったスケジュールにした方が、参加学生の理解や満足につながったと感じている。

Q4.今年度のインターンシップの運営で苦労された点は何ですか。

(自由記述)



(注) 事務局で自由記述を整理。複数回答あり。

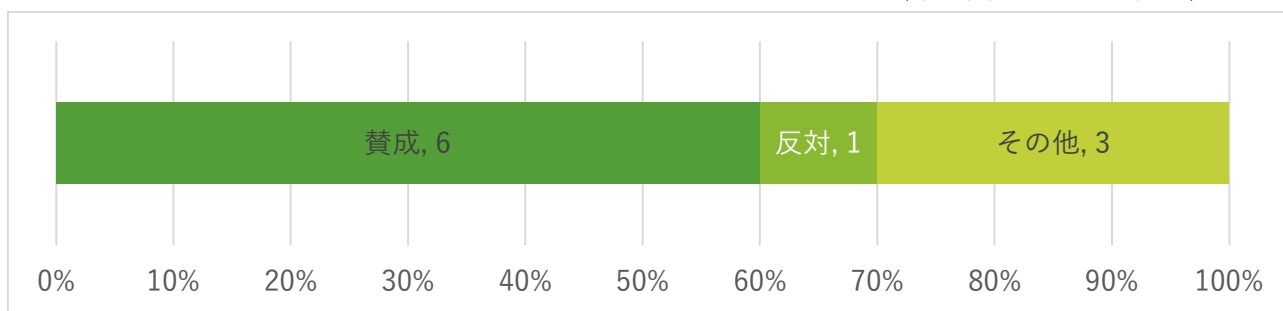
(主な意見)

学生との/学生同士でのコミュニケーションの活性化	オンライン環境で、やや学生側の緊張をほぐすのに時間を要した。アイスブレイクで雑談をするなど、丁寧に対応することで解消できた。
プログラムの準備に関すること (社内調整含む)	実習型インターンであるので、体験プログラムの企画と実施に向けての社内調整。
プログラムの内容に関すること	全面オンライン化は初めての試みであり、テーマや課題の設定、各日のカリキュラム策定、指導役の社員とのコミュニケーションなど、試行錯誤で進める点が多かった。
情報セキュリティの担保	初めてのオンラインでの開催ということで、情報セキュリティ面での担保を確り行うこと。(対面では対応していた) 弊社内の社内ネット環境を使用できない中で、資料をはじめとした事前の準備を徹底することに苦労した。

② 今後のインターンシップについて

Q1 来年度以降もオンライン(リアル併用含む)でインターンシップを行うことについてどう思われますか。

(単一回答及び自由記述)



(自由記述)

賛成	オンラインでも実施が不可能という訳ではないため、参加学生の機会提供は引き続きしていくべき。また、オンラインだと、どこからでも参加できるので、地域的にカバーできる範囲も広がり、学生の参加ハードルを下げられる点もよい。
	できればリアルで実施したいとは考えているが、オンラインに反対というスタンスではない。
	今年度のオンライン実施を経て、オンラインでも対面と大差なくプログラムを作成し運営できることを実感し、参加学生にも満足してもらえたため、賛成する。
	今年は初めてのオンライン開催ということで戸惑いもあったが、来年度以降は会社・学生ともにオンラインに慣れていることが想定できるため。
反対	社会の状況にもよるが、できれば現場を知ってもらうためにもリアル対応にて研修を実施したい。
その他	コロナ問題が収束し、オリパラの時期を考慮したうえで、今年同様期間短縮といった制約条件付きで検討したい。
	場面によって使い分ける、遠方者はオンライン併用はあり。
	来年度以降はリアルで行うことを基本とし、開催時点での状況に応じてオンライン併用することを検討したい。

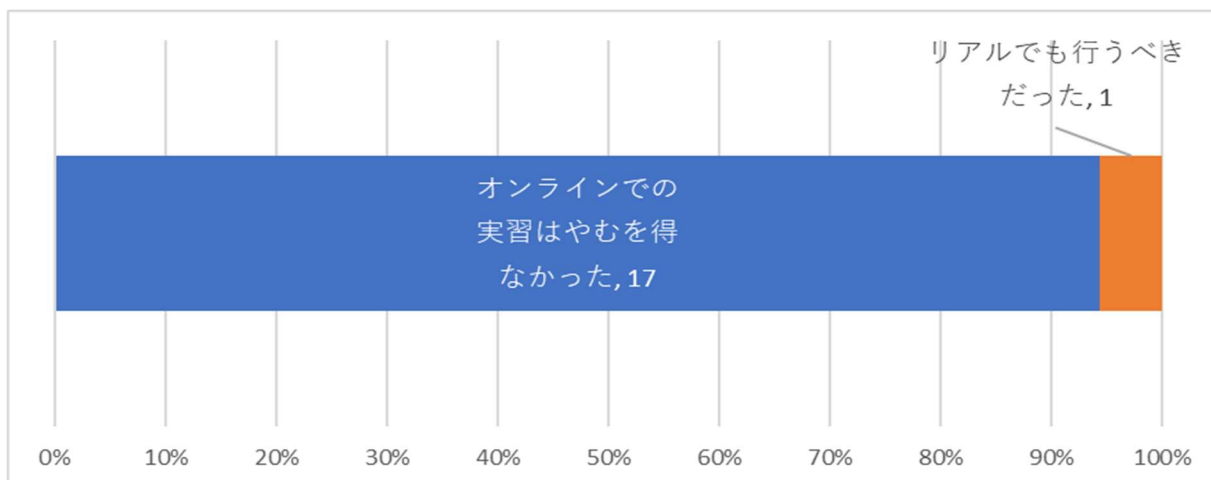
(2) 大学等へのアンケート結果

調査対象	2020年度経済同友会インターンシップに学生を派遣した16大学及び国立高等専門学校機構(2高専) 計18校 ⇒小樽商科大学、北海道大学、東北大学、新潟大学、九州大学、埼玉大学、お茶の水大学、琉球大学、岩手県立大学、山陽小野田市立山口東京理科大学、工学院大学、上智大学、昭和女子大学、聖心女子大学、東洋大学、龍谷大学、都城工業高等専門学校、沖縄工業高等専門学校
実施期間	2020年9月28日~10月9日
回収率	18校中18社(100%)

① 今年度のインターンシップ（オンライン）について

Q1.今年度、オンラインで実習を行ってみてどのように思いましたか。

(単一回答及び自由記述)



(主な自由記述)

オンラインでの実習はやむを得なかった

オンラインで行う上での限界はあると思っていたが、全くそうではなかった。貴重なお話や、体験をさせていただいてとても有意義な時間となった。

細かい指示はオンラインではないほうが良いかもしれないが、基本的にはオンライン実習のほうが利点が多いように感じた。

移動時の負担がかなり軽減されるため、オンラインで実施していただいたことに感謝している。

移動や宿泊を含めた感染リスク、罹患した際の対応や責任の観点からやむを得なかった。

やむを得なかったと思うが、ホッネは対面で受け入れてほしかった。本学では一般教養の単位認定科目となっており、オンライン実施により必要条件の5日間に満たないケースがあり、残念だった。

今年度の状況下では致し方がないところがあった。ただ、特に本学の学生にとっては県外の企業に訪問できる機会は大変貴重で、「県外企業を訪問する」「学びの場で県外の学生と交流する」ということそのもののインパクトが大きいと感じており、対面での実習ができなかったことは大変残念であった。

リアルでも行うべきだった

- 参加学生の事後のヒアリングで、一度は（一日でもよいので）、会社・工場・営業所など、現場を見たかったという意見が多かった。（9月以降、都内の感染状況（第二波）が落ち着いてきたことも影響している）
- 企業からオンラインで課題を出され、それを自宅でこなして（時折、チェックや相談も入るとのことだが）、結果を報告するという「一対一・放置型」のインターンシップもあった。（参加企業も、前例のない突然の（オンラインへの）プログラム変更で、相当困ったのではないかと）

Q2 今年度のインターンシップについて、どのような点がよかったですか。

(自由記述)

(主な自由記述)

総じてオンライン実習について企業側の対応を評価する意見が寄せられた。具体的には、海外の事業所勤務者らとのディスカッションの実現や移動の負担なく参加できたことなどオンラインならではの実習のメリットを指摘する意見や、オンラインであっても実習を通じて学生の成長につながったとする意見も見られた。

(主な自由記述)

海外の事業所や地方の事業所の方とオンラインでディスカッションをする企画を入れた企業があり、オンラインならではの体験ができたことと学生からコメントがあった。

オンラインツールを利用して、グループワークなども積極的にカリキュラムの中に組み込んでいただき、また、社員の皆様からフィードバックをいただいた点。

コロナ禍の中で移動の負担がなく、学生がどこからでも参加できた点。

今後多くの企業が今までとは異なる勤務形態を取り入れていくと思われる中で、いち早く実際のテレワークを体験できた点。

オンラインに変更となったことにこだわることなく熱心に取り組んだそれぞれの学生が、「自身が高めていくべきスキルがはっきりした」「自分の強み・弱みを客観的に見出す機会となった」といった感想に見られるように、今後の成長につながる気づきを得られた点がよかった。本学学生には不要であったがPC 機器貸し出し等の配慮をいただいたり、実習先によってはVRの機械を貸していただいたり、様々な工夫をいただいた点もよかった。

実施形態はどうあれ、今年度の1・2年生にとっての貴重な経験の機会を一定程度確保できたこと。企業の受入ご担当者が、参加学生に対し、事前のメールや面談等で、オンライン実習に向けた不安が軽減されるよう丁寧に対応いただいたこと。

活動日報等の学生の学びのためのルーティンについても、対応方法を工夫しながら、対面での実施と変わらないクオリティで企業側にご対応いただいたこと。

オンラインではあるが、グループディスカッションを多く取り入れていたこと。また、日報を書くことでその日の内容を整理することができた。

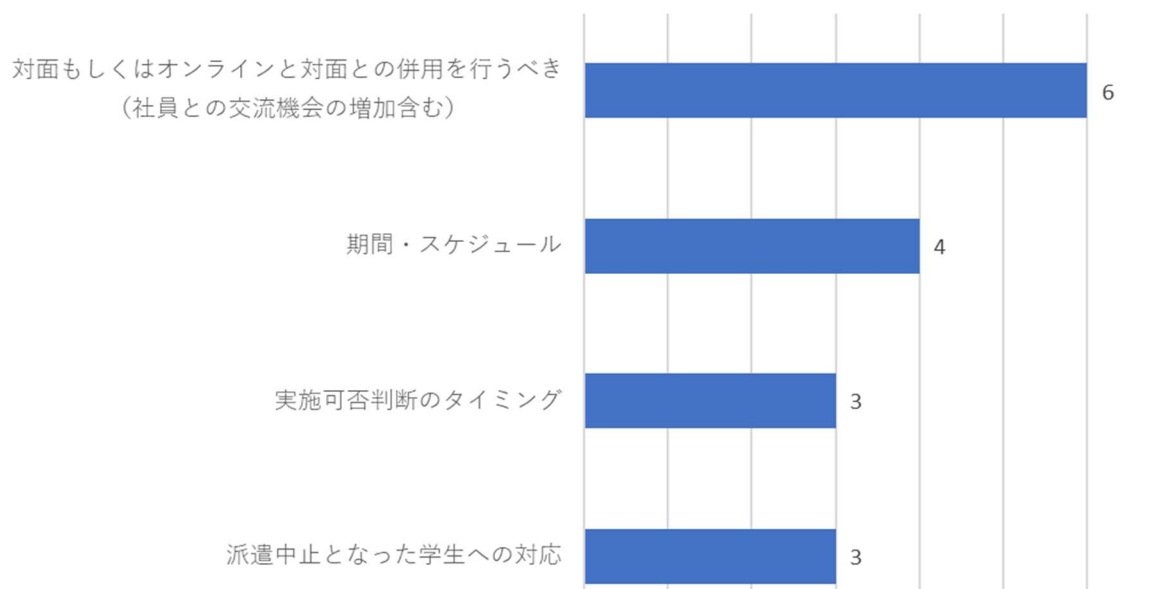
様々な事業の開発を体験できたこと。

オンラインながらも、実務に近いテーマに取り組めた点が大変良かった。

移動中や実習中の感染症対策が徹底されたこと。(結果として、本学の学生からは感染者・濃厚接触者が出なかったこと)

Q3 今年度のインターンシップについて、どのような点を改善すべきですか。

(自由記述)



(注) 事務局で自由記述を整理。複数回答あり。

(主な自由記述)

対面もしくはオンラインと対面との併用を行うべき (社員との交流機会の増加含む)

- ・オンラインと対面併用型のインターンシップのあり方を考えるべき。
- ・募集の段階で、オンライン型か、対面型かがわかるような形をとってほしい。(途中からの変更となると、選考方法にも影響が及ぶ)
- ・オンラインを取り入れる場合には、日数や時間数の事前調整が必要。(今年度は、時間数が圧倒的に短く、単位認定のために、別途、補足の授業や課題を実施しなければならなかった)

対面インターンシップの一括中止ではなく、地方大学から地方所在の実習地に行く場合を中心に、リモート以外の実施(数日だけでも現地見学があるなど)の許可などについて柔軟な対応をご検討いただければ、なお良かった。

対面での就業体験のように、会社の雰囲気を感じるということは困難であったと思う。実際に働いている方とのディスカッションや座談会などを今後企画していただけると幸いである。

期間・スケジュール

今年度は仕方がないが、オンラインであっても最低でも2週間の実習期間を確保していただきたい。移動の制約がなくなるので、途中に間隔をあけてもかまわないと思われる。

本学の事情として当初予定よりも夏季休暇期間が短縮となったため、実習日程の変更を企業と調整したことで学生が参加できたケースがあることから、引き続き柔軟な対応をお願いしたい。

実施可否判断のタイミング

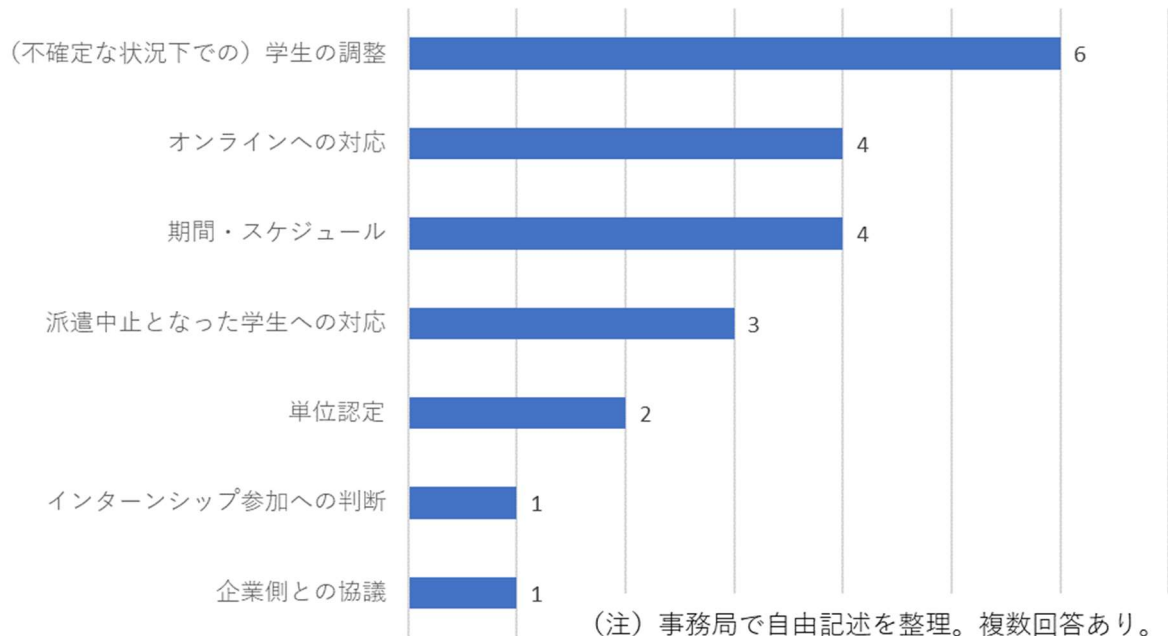
インターンシップの方向性を早めに決めてほしかった。

対面式からオンラインの実施変更通知の連絡を頂いたが、募集も最終段階で混乱が生じた。実施変更は早めの決断をお願いしたい。

派遣中止となった学生への対応

やむを得ない面はあったものの、学内選考終了後のタイミングで通知された諸変更により、本学の単位付与の要件を満たせない学生や、派遣中止となる学生が出る結果となった。実施を継続する実習先に受け入れ枠を増やしていただく等、更なる調整をしていただけたら有難かった。

Q4 今年度のインターンシップの運営で苦労された点は何ですか。(自由記述)



(不確定な状況下での) 学生の調整

実施形態は問わずインターンシップが実施されるかどうか未定の状態であっても学生募集とその後の選考は行っておかなければならないこと。

受け入れ人数に対し希望者が多かったため、学内選考の際に少々苦慮した。

- ・参加学生とのコミュニケーション（事前、事後指導を含む）
- ・募集と選考（応募フォームの作成やオンラインガイダンス、オンライン面接の実施）

オンラインへの対応

コロナ禍ということで、オンラインでの実施のみとなったこと。また、オンラインでインターンシップを受け入れてくれる企業数が限られること。

期間・スケジュール

企業個別の受入可否の状況に応じた、学生のマッチング～事前学習の時期・内容の調整。特に事前学習を前期の授業として決まったコマに位置づけ、実施している関係から、授業全体の計画と個別対応とを並行して進める必要があった。

応募開始から申込締切まで短時間であったため、学生に周知できる期間が限られていた点。

派遣中止となった学生への対応

派遣中止となった学生への対応に苦慮した。事務局も学生とはオンライン上でのやり取りとなり、細かい心情等をフォローしきれなかったかもしれない。結果としては、担当教員による配慮もあり、派遣中止となったものの学内での事前・事後講義に参加を希望するなど前向きな学生もいた。

単位認定

オンラインでの実施となったため、当初の予定よりもインターンシップ期間を短くする企業が増え、単位認定のための学修時間の確認の必要が生じたこと。

インターンシップ参加への判断

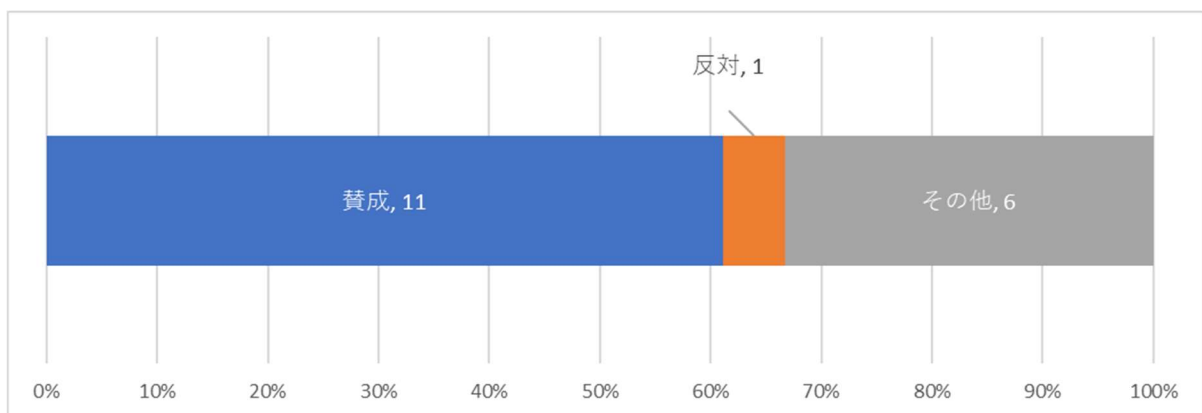
コロナ禍を受けて、夏休み期間の短縮や、公共交通機関での移動リスク等を鑑みながら、参加するか否かを決定することに苦労した。

企業側との協議

覚書や承諾書等の文面についての企業側との協議。大学・企業ともにほぼそのまま締結できるようなひな形を作成、共有していただければありがたい。

② 今後のインターンシップについて

Q1 来年度以降もオンライン(リアル併用含む)でインターンシップを行うことについてどう思われますか。(単一回答及び自由記述)



(ポイント)

総じてリアルとオンラインの併用を求める声が多数。

賛成

あらゆる勤務形態が広がっていくことを考えると、リアルとオンラインを併用したインターンシップがより勤務実態に近く望ましい。

新型コロナウイルスが収束しない状況であれば、場所に縛られず学生の参加機会を均等に保てるため賛成する。また、新型コロナウイルスの影響に関わらず、オンライン化は進んでいくことが想定されるため、リモートワークというものを実際に体験できる機会になるため、リアル併用での実施を希望する。

オンラインでも、十分に話や体験をさせていただいたので、今後も対面でのインターンシップを行えない状況なら、オンラインで行うのが良いと思う。
もう少しインターンシップの期間が長ければ非常に良いものになると思う。

地方からの参加であれば、参加の敷居が低くなる。学生間のコミュニケーションの取り方が課題かと思うが、学生にとってはオンラインでも貴重な体験になる。

参加にかかるコストの低さ、全国の支店の社員との交流プログラムも可能だったことなど、オンラインの利点はある。現地実習を基本にしつつ、プログラムの目的に合わせてオンラインを併用いただく方法が良い。

	賛成。ただ、実習に参加した学生の率直な意見を踏まえ、例えば実習前・中・後に半日でもよいので実際に対面にて会える機会があれば、オンラインと対面のメリハリのある実習になると思う。
	対面での効果も無視できないので両立したインターンシップの実施を希望する。
	オンラインと対面併用型のインターンシップであればよいと思う。
	コロナ禍の終息を前提としてリアルでの実施を中心にお願いしたい。地方にある大学としては首都圏での生活体験や企業のご担当者様、他大学の学生との対面での交流や繋がりを重視したい。
反対	できれば、オンラインでないほうがよい。
その他	コロナ禍の中では、仕方のない選択ではあったが、会社での実習実施が望ましい。
	リアルのインターンシップが原則で、そのプログラム内でオンラインでの実習が行われる方が望ましい。
	学生は、実際に出勤し、オフィスで業務に携わる社員の姿から学ぶことも多い。よって、状況が許すのであれば、対面での実習を基本とする方向性が望ましいのではないか。一方、今後の新型コロナウイルスの感染状況により、オンライン実習となることは致し方ないかと思う。
	現状では、リアルの実習でないと得られないもの・できない経験が多くあると認識している。ただし、業種や内容によっては、必ずしもオンライン実施（オンラインとリアルの併用）に反対する訳ではない。例えば実習初期のインプットの的な内容を、オンラインで、もしくは事前の課題等で扱い、自主学習も含めて十分に理解を深めさせ、リアルの実習では、リアルでその内容（「職場」での業務・体験・見学など）に注力するといった考え方も十分にあり得るのではないか。
	実習の導入部分（企業理解など）は場合によっては、オンラインでも実施可能と考える。一方で、グループワークなど、他者と多く関わる場面ではできるだけ対面で行う方が、より学習効果が高まるのではないかと学生との面談を通じて感じた。経済同友会インターンシップの基本枠組みである、「正課として単位化」や「実施期間」などを踏まえても、企業の実際の職場で、学ぶことができるのは学生にとってかけがえのない経験になると考えている。対面の併用など、オンラインのみではない実施形態をご検討いただきたい。
	来年度も新型コロナウイルスの状況が収まらなければ仕方がないが、オンラインはあくまでも例外的にさせていただきたい。ただし、業務説明のようなものはオンラインで事前に予習をさせておくということはオンラインでも可能であると思われる。

(2) 学生へのアンケート結果

調査対象	2020年度経済同友会インターンシップに参加した学生（59名）
実施期間	2020年10月1日~10月9日
回収率	59名中49名（83.1%）

① 今年度のインターンシップ（オンライン）について

Q1 今年度のインターンシップについて、どのような点がよかったですか。

（自由記述）

（ポイント）

オンラインで場所を選ばず参加をできたこと、海外支店の社員の話を聞いたことがよかった、参加者から刺激を受けた、会社、仕事について知ることができた、自己を振り返るきっかけとなったなど、学生に対して大きな効果があったといえる。

（主な自由記述）

通勤時間がなかったため、時間を有効活用できた点。
全国各地の他の学生の方と共に学びながら、損害保険について、またそれに関わる企業について学びを深めることができた。
全国各地の大学から参加者を募る事で、普段関わりのない方達とワークなどに取り組み、色々な視点を知ることができ非常に新鮮であった。また、講義ばかりではなく毎回の様に行われるグループ・個人ワークにより、オンラインでも参加しているという気持ちを持ち続けたまま取り組むことができた。そして担当の社員の方々の様子から実際の会社の雰囲気やそこで働く人々の人柄などが画面越しとはいえ、うかがうことができてよかった。
オンラインだからこそ、様々な地域の学生と共に学ぶことができたこと。また、海外支店の方のお話を聞く事ができたこと。
企業の活動について知る業務体験だけではなく、自身のことや他者について考える人間観についても改めることができるプログラムが組まれていた点。
自分は将来技術者を目指している。技術者は何かを開発するときには人や環境に配慮した設計をしなければならないが、実際の高い技術力をもった技術者がそういった倫理観をどのように考えているのかを知ることができたので満足している。
講義やワーク以外に、社員の方々とざっくばらんに話ができる場を設けて下さった点が良かった。また、実践的なワークを通じて、具体的な仕事内容を理解することができたことに加え、アナリストなどの見方の体験やこれからの課題の発見をすることができた。
働くことを自分ごと化して考えることができた。各プログラムにインプットとアウトプットをする機会があり、自身の成長にもつながった。
地方の大学に在学、地方部に在住しながら都内の大手企業でのインターンシップを経験できることは貴重な機会となった。また、就職活動等を意識することなく、業界や企業に関する知識を身につけられたり、グループワーク等の経験を得られるインターンシップは、「自分の成長」という点に全力を注ぐことができ経済同友会インターンシップの利点だと感じた。
オンラインになったことで実習が画面越しになった分、より集中して話を聞くことができた。また、自分で考えるという部分が多く、今までの日常がどのような技術によって支えられているのか改めて考えるきっかけになった。
日誌の提出の制度は良かった。人事の方との距離も近すぎず、遠すぎずよかった。同じ大学の生徒と2人で参加できたので、不安が軽減された。内容も日数(5日間)もちょうど良かった。
オンラインではあったが、社員の方々とコミュニケーションを密に行うことや、プレゼン資料について、ネットを介して直接指導を受けて仕上げる事ができた点が良かった。

コロナ禍で大変な状況の中、参加することが出来て本当に感謝している。オンライン開催は不安な面もあったが、オンラインでの経験は貴重な経験になると感じた。そして今回、プレゼンテーションを行ったが、社員の方々が発表準備の段階でも相談する機会を下さったことや、発表後にも様々なアドバイスをいただけたことが、自分の足りない部分を見直すきっかけとなりよかった。企業について深く知ることができ、働くことについて自分と向き合いながら考えることができた。オンラインだからこそ、すぐにメモなどを見返し、復習することができたこともとてもよかった。

オンライン開催ということで、参加前は不安もあったが、社員の方々の手厚いサポートや、参加生同士の協力で、不自由なくプログラムに参加することができた点。

Q2 今年度のインターンシップについて、どのような点を改善すべきですか。

(自由記述)

(ポイント)

対面式、実地でのインターンシップを求める声が多い。加えて参加者同士の関わりを深めたかった、海外赴任者の話を聞いてみたかったという意見や、本協会主催のセミナーを要望する声などがあつた。

(主な自由記述)

新型コロナウイルス感染症対策のため、対面式で行えなかったことは心残りである。非対面式業務の経験を得られたという点では良かった部分だが、やはりコミュニケーションが難しい部分もあり、企業で働く経験を肌で感じたかったというものが正直なところである。また大学と企業との間で、非対面式で行うのか参加を見送るのかなど、形式・見解の相違があつたため、その点をしっかりと擦り合わせられると学生としても納得してインターンシップに参加できるかと思う。

やはりオンラインでは作業のやりづらさがあり、感染症対策をした上でのオフライン実施が望ましかった。

全てオンライン上での実施だったため、会社の方に1度も足を運ぶことができなかった点はやはり残念だった。

実地研修(工場見学など)ができないという部分が大きいと考えるので、その機会を別日程に設けるなどのことができればよりよい研修になったように思う。

オンライン開催で、実際に会社に行ってみたり、社員の方、参加生と直接お会いできなかったのが少し残念だった。

もちろん得られるものはたくさんあつたが、期間がとても短く、もう少しいろいろな体験をしたかった。また、講義中心で実務体験が少なかったのももう少し体験出来たらうれしい。

オンラインのため、企業の雰囲気を感じづらく、社員の方や学生同士の交流も難しかった。

今回は、社員の方々が実際に働いている様子を見るができなかったため、その様子をオンラインでも見ることができる機会があると良いと思った。

座学が多かったため、ディスカッションなどを増やしたらもっと良かった。

グループワークの機会がなかったのが残念でしたが、それ以外はとても充実していた。

もう少しインターンシップ生同士の関わりが欲しかった。

海外に赴任している方のお話をオンライン上で聞いてみたかった。

商社や外資系の企業など、企業の選択肢がより幅広ければ良かったと感じる。また、経済同友会主催の参加者に向けた事前説明会、またはセミナーの様なものがあれば、実際の実習期間に向けて適切な準備などをした上で、より安心感を伴って取り組めたのではないかと感じる。

通信環境が悪い時があったので、改善できると良いと思う。

業務時間。オンラインかつ長時間（9時から17時）だったので、疲れ目が酷かった。

オンラインということですべてパソコンの前で疲れてしまったので、もう少し休憩時間があれば良かったと思う。

Q3 今後の経済同友会インターンシップについてご意見がありましたら、ご自由にご回答ください。（自由記述）

（ポイント）

経済同友会インターンシップに対して意義を感じる意見が多い一方で、対面でのインターンシップを求める声も多いのも事実。また、他大学の学生や過去の参加者との交流を求める声もあった。

（主な自由記述）

オンラインという形になってしまったのは残念であったが、本や新聞を読むだけでは得られない経験をする事ができ、視野が広がった。

2年生の段階で、このような経験ができ今まで漠然としていた就活がとても身近になる感覚があり、良いスタートを切ることができた。

3年生では自分の興味のある職種のインターンシップに参加すると思うので、2年生の時期にこういう形でインターンシップに参加できたのが大変良かった。

充実したインターンシップだったので、是非後輩にも積極的に参加してほしい。

ぜひ今後もこのような研修を続けてほしい。また、来年も参加することができればぜひ参加したい。

対面でしか得られない空気感や、他の参加者との交流の深まりがあると思うので来年度の参加者には対面での実施ができることを願っている。

コロナ対策のため、オンラインとなったが、判断が早すぎる。対面で行うべきだった。

現在は、リモートが主流になると思うが、極力対面で行うべきだと思う。

今回のインターンシップで様々な経験をする事ができた。ですが、オンラインではなく、オフラインで社員の方々や他大学の学生と出会い、業務を行いたかった。

もっと様々な業種のインターンシップを希望する。

また、可能であれば対面のインターンシップをして頂きたい。

事前講義・事後講義にとどまらず、定期的に意見交換や近況報告をする機会があったらいいなと思う。

過去の参加者との交流があれば嬉しい。

経済同友会主催のインターンシップのように就職活動を意識せず経験を積めるインターンシップは貴重なものなので、春などにも機会を設けていただけるとより多くの人が経験できるかと思う。

3. 審議経過

<実務者懇談会>

日 時 2020年10月22日(木) 15:00~17:00
場 所 オンライン会議
内 容 当協会の全会員企業・大学等の実務担当者を対象に開始し、初めてオンラインで開催した2020年度経済同友会インターンシップについて、会員・実習生を対象に実施したアンケート結果に基づき意見交換を行った。
また、オンライン実習教育価値向上プロジェクト会議の設置について報告した。

<オンライン実習教育価値向上プロジェクト会議>

第1回

日 時 2020年11月5日(木) 15:00~17:00
場 所 オンライン会議
討議テーマ 2021年度経済同友会インターンシップの展望
～ 教育効果を高める施策を巡って

第2回

日 時 2020年11月16日(月) 10:00~12:00
場 所 オンライン会議
討議テーマ 2021年度経済同友会同友会インターンシップの在り方について

第3回

日 時 2020年11月27日(金) 10:00~12:00
場 所 オンライン会議
討議テーマ 「提案」の取りまとめについて

4. 委員名簿

経済同友会インターンシップ推進協会 オンライン実習教育価値向上プロジェクト

2020年12月3日現在
(敬称略)

【企業】

岩崎晃洋	野村證券株式会社 人事戦略部採用グループ ヴァイス・プレジデント
薄井光	花王株式会社 人財開発部門 智創部長
尾上さやか	東日本旅客鉄道株式会社 人財戦略部 マネージャー
長屋晶子	第一生命保険株式会社 人事部 人事統括課長
深水聡	コニカミノルタ株式会社 人事部 人財採用グループ キャリア採用担当マネージャー
山内一将	第一生命保険株式会社 人事部人事統括課採用グループ アシスタントマネージャー

【大学】

猪股歳之	東北大学 高度教養教育・学生支援機構 准教授 キャリア支援センター 副センター長
大津晶	小樽商科大学 商学部社会情報学科 教授
亀野淳	北海道大学 高等教育推進機構 准教授 キャリアセンター 副センター長
高木航平	上智大学 グローバル教育センター グローバル教育推進室 チームリーダー
高澤陽二郎	新潟大学 教育・学生支援機構教育プログラム支援センター 助教

【一般社団法人経済同友会インターンシップ推進協会】

藤巻正志	専務理事・事務局長
------	-----------

【事務局】

田中聡	一般社団法人経済同友会インターンシップ推進協会 マネージャー
小倉都	一般社団法人経済同友会インターンシップ推進協会 アシスタント・マネージャー
江幡美幸	一般社団法人経済同友会インターンシップ推進協会 スタッフ